

マレーシア政府派遣留学生 の対人コミュニケーション障害

—言語行動を面接から分析して—

The Problems of Malay Students in Interpersonal Communication: Analysis of Research Interviews

伊藤 恵美子 (Ito, Emiko)

This paper is a pilot study of the cross-cultural project (Ito 2000). The main purpose is to gather and analyze problems facing international students in interpersonal communication. The data are based on research interviews of 5 subjects - 4 native speakers using Malay and 1 native speaker using Japanese. From the analysis of the data, the causes of the problems are divided into 4 factors - (A) the Malay government program, (B) the Japanese educational system, (C) the Japanese language, (D) the difference of the cultures, Malay and Japanese.

1. はじめに

日本語学習において習得が困難な例としてよく引き合いに出されるのは、表記法¹⁾と語彙²⁾、それに敬語である。敬語の機能は文字どおりに解釈すれば、相手に尊敬の念を示すことにあるが、これは人間関係に距離を保つ側面も有している。日本人と良好な人間関係を築こうとして留学生³⁾が敬語表現を使い続ければ、その意に反していつまでたっても親しくなれない。

対人コミュニケーションは、メッセージの送り手と受け手の間で繰り返される動的過程であり、受け手はコミュニケーションのプロセスを成立させる最も重要な要素である (パーロ 1972)。また、人は自分の文化的期待に従って行動する (シタラム 1985)。したがって、受け手の文化を反映する言語への正しい理解が欠如していれば、異なる文化のコミュニケーションは齟齬をきたす。

本稿は、日本で学ぶ留学生が日々の生活の中で対人関係において抱えている問題を、留学生に対して行った面接調査の内容から分析⁴⁾して、その問題が少しでも軽減するような対策を探る。

2. 留学生交流の背景

2.1 主要国における留学生数

国際交流が盛んになるにつれて、留学生は増加を続けて全世界で留学生は150万人を超えて

いる（留学交流事務研究会 2000, 17）。留学生交流の意義を「今後の留学生政策の基本的方向について（留学生政策懇談会第一次報告）」は、次の三点に認めている。第一は、日本と諸外国の間の友好信頼関係を築く上で大きく貢献すること。第二は、各国が教育研究基盤を共有することによって世界的な教育研究の発展を促進し、多様な文化的背景を有する人材の受入れは教育環境に刺激を与えて活性化と水準の向上を促し、地域社会・企業の国際化にも寄与すること。第三は、開発途上国が日本に要請している人材育成の協力に応えること（留学交流事務研究会 1998, 187-200）である。

では、留学生数の現状はどうだろうか。表1は、アメリカ・イギリス・ドイツ・フランスと日本の留学生数の一覧表である。国費留学生数はフランスに次いでいるものの、他の国々に比べて日本が受け入れている留学生は桁違いに少ない。

表1 主要国における留学生数

	アメリカ	イギリス	ドイツ	フランス	日本
高等教育機関在学者数 (千人) (注1)	8,213 (14,300)	1,230	1,838	2,126	3,612
留学生 (受入れ) 人数 (人) (注2)	490,933 (98年)	213,264 (97年)	158,435 (97年)	147,995 (98年)	55,755 (99年)
国費留学生数 (人) (注3)	3,437	3,277	5,783	12,528	8,774

(注1) 調査統計企画課調べ（アメリカの（ ）はパートタイム学生を含めた数値。アメリカ、ドイツ、フランスは1996年現在、イギリスは1997年現在、日本は1999年現在）。

(注2) アメリカはIIE「OPEN DOORS 1998 / 99」、イギリスはHESA「STUDENTS in Higher Education Institutions 1997 / 98」、ドイツは連邦統計庁「Bildung im Zahlenspiegel 1999」、フランスはフランス国民教育省、日本は留学生課調べ。

(注3) アメリカはIIE「OPEN DOORS 1998 / 99」、イギリスはブリティッシュ・カウンシル、ドイツはDAAD、フランスは在日フランス大使館、日本は留学生課調べ。

(留学交流事務研究会 2000, 18)

2.2 滞日留学生数の推移

1983年（昭和58年）の「21世紀への留学生政策に関する提言」、その翌年の「21世紀への留学生政策の展開について」を経て、「留学生受け入れ10万人計画」が文部省から出された。この10万人という数字は、当時のフランスが受け入れていた留学生数である。

表2に、1978年以降昨年までの滞日留学生総数の移り変わりを示した。1985年のプラザ合意以来、円高基調が続き日本経済のパフォーマンスと同調するかのように留学生数は伸び続けた。アジア通貨危機の影響を受けて、留学生数は1995年をピークに翌年に初めて減少するが、1999年には増加に転じた。しかし、中曽根康弘が首相当時目標としていた、21世紀初頭に留学生を

10万人受け入れようという計画は、現実のものにならなかったと言ってよい。

表2 滞日留学生数の推移

	78	83	87	90	95	97	99(年)
留学生総数(人)	5,849	10,428	22,154	41,347	53,847	51,047	55,755
私費留学生数(人)	4,774	7,483	17,701	35,360	45,245	41,273	45,439
国費留学生数(人)	1,075	2,082	3,458	4,961	7,371	8,250	8,774
外国政府派遣留学生数(人)	0	863	995	1,026	1,231	1,524	1,542

(注) 外国政府派遣留学生⁵⁾は、マレーシア、インドネシア、タイ、シンガポール、アラブ首長国連邦、クウェート及びウズベキスタンの各国政府派遣留学生である。

(留学交流事務研究会 2000, 20)

2.3 マレーシア政府派遣留学生

1981年に首相に就任した Mahathir bin Mohamad (以下 Mahathir と称す) は、ルック・イースト政策 (Look East Policy) を提唱した。ルック・イースト政策とは、「マレーシアという発展途上国を近代国家、工業国家へ発展させるには、欧米諸国ではなく日本や韓国などマレーシアの『東』にある国々に学ぼうという政策である」(Mahathir 1995, 20)。Mahathir のルック・イースト政策に関する外遊演説が収められている、「ルック・イースト政策概要」(1984年4月)によると、政策を具体化する事業計画として①日本においてマレーシア国民の産業・技術の研修を行うこと、②日本の大学・技術教育を受けること、両国の高等教育機関の協力を図ること、③日本においてマレーシアの管理職員を短期研修させること、④日本とマレーシア両国の研修・研究・事業の運営にあたる機関の連携、の四項目が挙げられている。これに基づいて現在行われている主なプログラムは、①学部学生派遣プログラム、②日本語教師プログラム、③高等専門学校派遣プログラム、④産業技術研修プログラム、⑤経営実習研修プログラム、⑥政府幹部職員研修プログラムである(飯塚 1999, 3)。これらのプログラムのうち、本稿では「高等専門学校派遣プログラム」で来日する留学生の現状と問題点に焦点を当てる。

3. 先行研究

留学生の友人関係を調査した研究に、瀧本(1992)、横田(1991a, 1991b, 1993)がある。

瀧本⁶⁾は、獨協大学の日本人学生に対して行った調査である。「大学は□を通じての人間形成の場である。」という文の□に、「理想」「一般の学生」「自分自身」という三段階のレベルで適当な言葉を入れてもらった。結果は、「理想」のレベルでは「学問」が75%、「一般の学生」のレベルでは「クラブ活動」が35%で「人間関係」が30%で「遊び」が20%、「自分自身」のレベルでは「人間関係」が40%で「クラブ活動」が30%で「学問」が15%であった。この調査

結果から、日本人の大学生にとって「理想」はともかく、現実的には大学はもはや最高学府というより、「クラブ活動」を通して友人との「人間関係」を育む場所であると考えていることがわかる。

横田 (1991a) は、日本人学生と留学生に対して行った、人間関係の親密化に関する研究である。予備調査は「もしも留学生と日本人大学生の間で本当に心を許すことの出来る友人関係が築きにくいということがあったら、その理由としてどのようなものが考えられますか。」と自由記述で尋ねた。この結果を基に、調査紙で日本人学生版36項目と留学生版38項目について、どの程度親密化を妨げる原因になっているかを、「全く原因でない」から「まさしく原因である」まで五件法尺度で調べた。調査対象者は、東京の日本人学生242名と全国の大学の留学生162名で、アジア出身の留学生が91%を占めている。結果は、少なくとも一人は「かなり仲がよい」あるいは「非常に仲がよい」という人間関係を持っているのは、日本人学生同士では同性間が96%で異性間が73%、日本人学生の友人がいる留学生では同性間が41%で異性間が21%、留学生同士では同性間が69%で異性間が46%であった。日本人学生同士・留学生同士の友人関係に比較して、留学生と日本人学生との友人関係が希薄なことを示すデータである。また親しくなりにくい原因として、留学生にとっては「日本人学生の希薄な主張」「言葉の障壁」「日本の慣習」、日本人学生にとっては「漠然とした不安と遠慮」が指摘されている。さらに、因子分析によって、日本人学生が友人を形成する初期に緊張を減らそうとする傾向があることを見出している。

横田 (1991b) は、横田 (1991a) とデータを同時に収集したようで、予備調査から本調査への流れと調査対象者は同一である。予備調査で「日本において、あなたが最も親しい学生(親友)と話す話題にはどのようなものがありますか。」と自由記述で尋ね、得られた回答から12領域24自己開示項目を設定して本調査を行っている。12領域は、1「将来」、2「目標」、3「勉強」、4「大学」、5「趣味」、6「意見」、7「人間関係」、8「異性関係」、9「心傷」、10「身体」、11「過程」、12「性」である。この12領域は、1領域から6領域までを志向的領域、7領域から12領域までを関係的領域と分けられる。12領域は、それぞれ同性の相手と異性の相手に対して回答するので、24自己開示項目となる。回答形式は、「全く話さない」から「十分に話し、すべて打ち明ける」までの五件法尺度である。回答者は横田 (1991a) と若干異なり、日本人学生238名と留学生はアジア系のみで128名である。結果には、日本人学生間では友人形成の初期に「人間関係」「異性関係」「心傷体験」など関係的領域の話題が持ち出されやすく、これらホンネの話はタテマエよりも緊張を低減しやすいと考察がある。一方、留学生間では留学と関係の深い志向的領域が話題となり、その話題について意見の交換を行おうとするので、両者は親密化することが難しいと分析している。

横田 (1993) は、留学生と日本人学生がどのように親しくなるかを留学生に対して行った面接調査の報告である。留学生が日本人学生と親しくなったケースは、「日本人同士の場合と格別に異なるところがあるわけではない。」(95) としながらも、親しくなったケースに共通する事項を簡潔にまとめている。第一は、親しくなる関係は留学生が来日あるいは入学したばかり

のときに始まったものが多いこと。第二は、親切であることが基調であること。第三は、親密になるにしたがって関係は対等・互恵的なものになっていくこと。第四は、自分の意見をきちんと言うことが評価されていること。第五は、親密になる関係では初期の時点で勉強が関係の中心ではなく全体的なものに変化することである。

以上の概観により、先行研究は留学生が日本人学生と人間的関係を築く上でカギになると思われることを実証的なデータから探り、重要な示唆を提出していることがわかる。つまり、日本人学生にとって大学は人間関係を形成する場であり、友人とはタテマエではなくホンネで異性関係や心傷体験を語るプロセスを経て親密になっていく。それに対して、留学生はその立場において当然のことながら、関心の高い話題は将来や目標や勉強などであり、友人には率直な意見の交換を望んでいる。この留学生が志向する話題は、日本人学生に精神的な緊張を強いることになり、その結果、両者が仲がよい友人に進展することは容易ではないことが理解できる。

問題の所在は、これは異文化を視野に入れた研究に共通して言えることであるが、留学生の背景が軽んじられていることにある。留学生の母語や文化や種族などは考慮に入れられず、十把一絡げに留学生とされている研究が大半を占めている。先行研究でも横田 (1991b) を除いて、留学生としか記述されていない。また異文化というと、日本とアメリカ、あるいは西洋対東洋という図式で捉えるきらいがあり、留学生を欧米出身とアジア出身に二分して事足りるとされていることも多い。本稿は、留学生の出身国ではなく帰属する母語の文化を重んじる⁷⁾ことにする。調査対象は、まだ日本であまり紹介されていない東南アジアのマレー文化圏、つまりイスラームのマレー語母語話者に限定する。

4. 調査

4.1 方法論

調査の方法は、調査的面接法 (research interviewing) を採る。調査的面接法とは、「ある課題解決のための資料としての情報を収集することを目的に、個人または集団を対象にして、面接という手段を介して行われる調査方法である」(續 1975, 65) と定義される。

調査的面接法は、集団特性に接近する角度によって、統計調査 (statistical research)、質的調査 (qualitative research)、情報収集 (information-gathering) の三種類に分けられる。調査は、その目的によって、探索的段階の調査、記述的段階の調査、仮説検証的段階の調査に大別できる。面接は、事態の構造に注目すると、構造化面接 (structured interview) と非構造化面接 (nonstructured interview) に区別されるが、純粋に非構造的な面接はプレーン・ストーミング的に展開した場合であろうと言われている。

本稿は、問題とする社会現象の実態がどのような傾向をもっているか、つまり現象の全体的な構造の概況を把握することを目的としているので、探索的段階の調査であり、質的調査であり、非構造的な面接と位置づけられよう。

4.2 面接調査(1)

4.2.1 調査概要

1998年8月に、留学生の抱えている問題点を抽出するために面接調査を行った。国立高等専門学校⁹⁾の5年生⁹⁾、3名に対して来日後の生活で特に記憶に残っていることを自由想起してもらった。心理的な内容を扱う、言い換えれば自己の内面を語ることになるので、一人の留学生に特に仲のいい友人を紹介してもらおうという手順を踏んだ。

まず初対面の留学生に調査の目的を説明して協力をお願いした。面接調査の全体を録音しなかったが、録音に関しては了解を得られなかったので、留学生の話で重要と思われる内容を筆者が書き留めた。面接は非構造的に行い、5時間ほどかかった。留学生のお気に入りのレストランで食事をしながら、マレーシアの観光名所やそれぞれの故郷のお国自慢や卒業後の進路などを話してもらって、留学生がリラックスできる雰囲気を作った。やがて2時間ほど経過したころ、重い口が開いた。一人が下を向きながら恥ずかしげにぼそぼそと話しはじめると、聞いていた留学生がその内容に関する話を引き継ぎ、もう一人がさらに展開させるような形で語った。来日直後の表面的な失敗事例から、勉学で困難を抱えている点、日本人と友達になれないという悩みまで話題は広がった。

4.2.2 結果と考察

来日後の生活で特に記憶に残っていることの第一は「日本に来て困ったこと」である。第二は「日本に来て良かったこと」である。第三は「日本語が通じなかったこと」である。第四は「いやだと思ったこと」である。以下、順に箇条書きにする。

① 日本に来て困ったこと

- ・バスの乗り方がわからなかったこと
- ・お金の価値がわからなくて高価な物を買ったこと
- ・食材をレストランの人も知らないこと
- ・学生寮の規則
- ・寒い季節に暖房がないこと
- ・授業で使われる専門用語がわからないこと
- ・日本人のアメリカ英語がわからないこと
- ・英語が理解できても日本語で書けないこと

② 日本に来て良かったこと

- ・四季があること
- ・商品の種類が豊富なこと
- ・テレビ番組が面白いこと
- ・店のサービスがいいこと
- ・夜遅く歩いても安全なこと

- ・ 運転者が親切で道を横断しやすいこと
 - ・ バスが時刻表どおりに来ること
 - ・ ごみの分別回収
 - ・ 部活動でよく練習すること
 - ・ 町が清潔なこと
- ③ 日本語が通じなかったこと
- ・ 市役所や銀行や郵便局や病院で使われている言葉がわからないこと
 - ・ 地域の言葉がわからないこと
 - ・ 丁寧語を習ったが若者は丁寧語を使わないこと
 - ・ 日本語がわからないと思われていて日本人が日本語で話しかけないこと
 - ・ 日本人は冷たくて友達になれないこと
- ④ いやだと思ったこと
- ・ 頭をたたくこと
 - ・ 朝入浴すると頭を触られること
 - ・ いじめ
 - ・ 知っていても助けてくれないこと
 - ・ 日本語を間違えたら笑われたこと
 - ・ コンパで酒を強要されること

「地名がわからなくてバスを乗り間違えた」ことや、「3か月分前もってもらった奨学金でパソコンとかカメラなど高価な物を買ってしまって生活費に事欠いた」というのは、初めての外国旅行で誰もが多かれ少なかれ経験する、微笑ましい失敗の範囲と言えよう。深刻なのは、留学という目的達成の障壁になる学習上の困難と、人間関係がうまく作れないことである。

留学生の記憶に残っていることで、深刻な問題と考えられることを原因別に分類すると次のようになる。

- (A) 留学プログラム：予備教育の内容
- (B) 日本のシステム：学生寮の規則、高等専門学校の授業配当、専門科目・専門用語のフォローアップ
- (C) 言葉に関すること：地域語、若者語、お役所言葉、日本人英語、和訳の日本語、丁寧語
- (D) 文化の違い：生活習慣の違い、日本人のイスラームに対する無知、日本の習慣

留学プログラムが原因と考えられることに、予備教育の教育内容がある。1994年以降、留学生は国で二年間の予備教育を受けてから来日することになったが、それ以前は東京で予備教育を一年間受けてから日本各地の高等専門学校に派遣されていた。以前のプログラムを知っている留学生は「前のほうがよかった」と、政府の方針変更に対して珍しく批判的であった。

日本のシステムに起因することとしては、次の二点である。第一点は、学生寮の規則に関することであり、日本人学生が高校生に相当する年齢であることから課せられている規則に対して「留学生はもう大人だ」と理不尽さ⁹⁾を感じている。第二点は、授業の配当である。高等専門学校では低学年から専門科目がカリキュラムに組み込まれているので、三年次に編入する¹⁰⁾留学生は、科目によっては全く基礎がないまま次の段階に投げ込まれている。専門科目のフォローアップが行われているが、留学生にとって十分でないようである。

言葉に関することは五点ある。そのうち、地域語と若者語については教育の現場で指導すべきことか、生活の中で個々の学習者が身につけていけば済むことか、見解が分かれるところであろう。お役所言葉も正規の学習項目に入っていないが、オリエンテーション的に来日間もないうちに紹介しておくことはできよう。日本人英語については日本人的な発音も一因になってはいるだろうが、英語教育におけるスタンダードに、日本ではアメリカ英語、マレーシアではイギリス英語が採用されているために起こると容易に判断できる。英文和訳の際に使われる日本語には確かに日常で使われない独特の言い回しが残存していて、それは日本語教育の場で提示されていないので、留学生が戸惑うのも無理はない。「国で習った丁寧語を日本の若者は使っていない」という留学生の指摘はもっともである。日本語教育ではどんな相手に対して使っても安全な言い方、言葉を換えれば失礼にならない言い方を指導するからである。両刃の剣である敬語の機能が露見した形となった。

文化の違いは大きく三点に分けられる。単なる生活習慣の違いであってそれほど根が深いものではないこと、平均的日本人全体に該当すると考えられるイスラームに対する無知と彼我の宗教意識の違い（森・杉万 1993）¹¹⁾、それに日本の社会習慣である。朝入浴するか夜入浴するかは生活習慣の違いにすぎない。しかし、朝入浴して濡れている髪を触られると問題になる。頭は神聖な場所とされているからである。コンパの席で酒を強要するのは、イスラームに対する無知に含まれる。「ボーリングに一緒に行ったので友だちになったと思ったが、日本人はそう思っていなかった」や「日本語で話しても無視されて冷たくされた」は、留学生の日本語力が低いからではない。留学生が呟いた「日本人は日本人じゃないと友達になれない」や「チューターの友達が私の友達になる」に、日本人の人付き合いのパターンが図らずも現われている。「友達」や「もてなし」の概念が、日本社会とマレー社会と同じではないことから、留学生に人と人との心的距離の取り方に戸惑っている様子が窺われた。

ここで、原因ごとに問題が軽減される対策を考えるとしよう。(A)留学プログラムに関しては、1998年の入学者でもって高等専門学校派遣プログラムは終了していることから、問題は解消したと思われる向きがあるとしたら、その判断は早計であると言わなければならない。というのは、最後の派遣生は現在日本で留学生生活を送っているが、日々の生活で困難に直面している可能性があるからである。イギリスの教育制度の流れを汲んでいるマレーシアは日本以上の学歴社会であり、学士号を修めた者とそうでない者との収入・昇進の差が大きいという社会事情¹²⁾があるので、高等専門学校派遣プログラムの元留学生からは不満の声が上がっていた。他方、国際交流基金がマレーシアに教師を派遣するなど予備教育に協力をしている（留学交流事務研

研究会 2000, 110-111) が、プログラムを運営するマレーシア政府の財政的負担は小さくないので、マレーシア政府はツイニング・プログラム¹³⁾を推進中である。ツイニング・プログラムに、本稿で明らかになった問題が引き継がれないことを関係者に強く望む。(B)日本のシステムに関しては、各高等専門学校の裁量権の範囲であり、本稿の議論の核心から外れるので捨て置く。(C)言葉に関することに関しては、予備教育としての日本語教育の限界を象徴している。筆者も予備教育に携わった経験があるので事情を理解しているが、国内の予備教育の現場では大学への進学率を上げることが至上命令であり、日本語能力試験の一級合格を目指した教育が主になされる。海外においても予備教育が担っている教育事情は国内と変わりなく、文型・語彙の定着と読解を主眼において日本留学後の専門教育に支障がないような教授項目が選択されている¹⁴⁾。専門分野に進んだ留学生の指導者は、このような予備教育の事情と限界を理解して、来日直後の留学生にオリエンテーション的な教育を施したり、第二言語である日本語のコミュニケーション能力を養う必要があると考える。(D)文化の違いに関しては、まずホスト側の日本人に対する啓蒙活動が行われることが望まれよう。次に考えられることは、日本語教育の場で異なる文化におけるコミュニケーションの違いを提示すること、アカデミックな面のみならず日本語の語用論的能力が向上するような指導を行うことであろう。

4.3 面接調査(2)

4.3.1 調査概要

前節の面接調査の結果を裏付けるために、1998年10月に留学生¹⁵⁾とそのチューター¹⁶⁾各1名に、半構造化した面接を授業後に教室で約1時間行った。両名とも国立高等専門学校の4年生である。調査対象者の音声言語を採ることが目的ではないので自己開示 (self-disclosure)¹⁷⁾がされやすいように、この面接調査も録音しないで筆者が面接の内容を書き留めた。

まず、チューターに留学生の生活状況話を話してもらった。その後、面接調査(1)で得られた事項を確認する形で面接を進めた。次に、そのチューターが担当している留学生に、チューターに尋ねた内容と同じことを質問した。

4.3.2 結果と考察

① チューターの言葉

- ・留学生というより寮生として捉えているので留学生を特別視はしていない
- ・寮の規則は緩いから問題ない
- ・留学生は教科に問題ない
- ・食事が別だから留学生の文化は違う文化だと感じる
- ・トランプなどで留学生と一緒に遊んでいる
- ・留学生とは話題が合わない
- ・日本人同士の初対面の難しさが留学生とはずっと続く
- ・話が途切れて気楽に話しくくなり干渉し合わない

② 留学生の言葉

- ・寮だから友達がいるから困らない
- ・日本人とは馬が合わない
- ・日本人のしたいことがわからないから友達になれない
- ・マレーシアなら外国人が来たらすぐに友達になれる
- ・寂しい時日本人と話すよりゲームをする

日本人が期待している人間関係の枠組みから、留学生が外れた言語行動をとっていないかを調べようとしたのであるが、その意に反してチューターと留学生の話は一致した。一般に流布しているアジア人蔑視の態度がチューターに見られないものの、友人関係を築くのに苦勞して「干渉し合わない」ところに落ち着く様子が認められた。留学生は、初めは「寮だから友達がいるから困らない」と応えた。確かに奨学金をもらい経済的な苦勞はなく、寮の改築など学校側の受け入れ体制は整っているので日常生活で困るようなこともなく、一般の私費留学生に比べれば物質的にはるかに恵まれている。ところが、「寂しい時日本人と話すよりゲームをする」と俯きかげんで話す姿は、日本の生活に満足している留学生に見えない。留学生は日本語で自らの意思を伝えることができるし、日本人学生の意図を理解することもできるが、それ以上ではないことがわかった。換言すれば、留学生は会話の情報伝達機能は果たしているが、社交機能は満たされない状況に身を置いている。

この状況をマスローの理論で説明を試みよう。マスローの理論では、人間の欲求は階層になっていて基本的な欲求が満たされれば高次の欲求に向かうとされている。階層は、身体的欲求、安全の欲求、愛と所属の欲求、自己尊重欲求、自己実現と、基本的な欲求から高次の欲求の順になる（佐野 1992, 73-74）。面接に協力してくれた留学生は、身体的欲求と安全の欲求は満たされているが、集団に所属しようとする欲求が完全には満たされていない状況にいると判断される。

5. 今後の課題

水谷（2000）は日本語教員の養成に関する調査研究協力者会議の報告書であるが、日本語教員養成において必要とされる教育内容について、コミュニケーションを核として、社会・文化・地域に関わる領域、教育に関わる領域、言語に関わる領域の三領域が列挙されている。日本語教員養成において必要とされる教育内容は、留学生に必要な教育内容を反映している。

この三領域は、社会・文化・地域、言語と社会、言語と心理、言語と教育、言語に区分され、それらはさらに下位区分されてキーワードが付されている。社会・文化・地域の下位区分のキーワードには、社会習慣、異文化適応、カウンセリングなどがある。言語と社会の下位区分のキーワードには、外国語・第二言語教育、語用論ルール、会話のルール、発話行為などがある。言語と心理の下位区分のキーワードには、言語転移、文化摩擦、自己開示などがある。言

語と教育の下位区分のキーワードには、多言語・多文化、インタラクション、母語保持などがある。言語の下位区分のキーワードには、ポライトネス、待遇表現、対人関係構築・維持、日本語能力などがある。

面接調査から得られたデータの限りでは、井上(1997)で報告されているような悲惨な状況に幸いにも至っていないが、留学生を指導する身としては何らかの対策を講じる必要性を切に感じる。前述の会議の報告書から、対策は心理学的方法と言語学的方法に大別できよう。

まず心理学的方法において可能なことに、ソーシャルサポート (social support) が挙げられる。ソーシャルサポートとは、家族や友人など個人を取り巻く人々からの有形・無形の援助を指し、人はソーシャルサポートが十分に得られる時にはストレスのある状況によく対応できる(嶋 1992, 45)とある。ソーシャルサポートの研究には、日本人大学生を対象とした嶋、中村・浦光(2000)の他に、中国系留学生を対象とした周(1993, 1994, 1995)がある。日本人大学生を対象とした研究ではあるが、ストレスレベルが高くなるとサポートが必要とされ、サポートが得られると思うこと自体が孤独感の低減をもたらすという調査報告(和田 1998, 199)もある。また、留学生を受け入れるに際して、日本文化への意欲を持たせるとともに留学生の自文化を十分尊重する配慮が必要であるという主張(井上・伊藤 1997, 303)は、文化相対主義の立場から賛同を得られるだろう。以上の議論をまとめると、留学生と専攻が同じである日本人学生や、同じクラブの友人や、寮生などが積極的に留学生と交流しようと主体的に思うような環境作りが望まれる。言い換えれば、留学生会館などの施設が整備されてきた現状では、留学生が日本人の人付き合いのパタンに参入できるようなソフトの企画力が、留学生を受け入れるセクションの課題になることは間違いない。

第二に、言語学の知見を活かすことが考えられる。発話行為 (speech acts) の実証的な研究分野では、多言語・多文化の比較を対象にした比較文化語用論(例えば Blum-Kulka ら 1984)や、学習者の言語を対象にした中間言語語用論(例えば Takahashi ら 1987)がある。これらの研究は発話行為がなされる際の発語内効力 (illocutionary force) とポライトネス (politeness) の関係に注目している。ポライトネスは、端的に言えば相手に対する配慮であり、人と人との心的距離を測りかねている留学生は、まさに異文化におけるポライトネスに戸惑いを感じているのである。

本稿の面接調査により、対人コミュニケーションにおいて留学生が抱えている問題が明確にされた。今後は留学生の文化背景を十分尊重して、コミュニケーション上の問題を軽減することができるように、語用論の観点から研究を続けていきたい。また日本語の指導項目に、語用論的能力が発達するような内容を盛り込むことも将来的には行っていきたい。

[注]

- 1) 日本語の表記は、漢字・平仮名・片仮名・ローマ字の四種類を使い分けなければならないが、正書法は確立されていない。
- 2) 語彙においては、和語・漢語・外来語の三種類あり、意味的には重なる部分と重ならない部分がある。
- 3) 留学生とは、日本の大学・大学院・短期大学・高等専門学校・専修学校(専門課程)、及び日本の大学に入

学するための準備教育課程において教育を受ける外国人学生で、「出入国管理及び難民認定法」別表第1に定める「留学」の在留資格により在留する者と、定義する（留学交流事務研究会 2000）。

- 4) 本稿は、愛知淑徳大学大学院コミュニケーション研究科異文化コミュニケーション専攻に提出した修士論文の一部を基に、新たに考察して加筆を行ったものである。
- 5) 当該国の人材育成のために、当該国政府の経費負担により派遣された留学生のことである。外国政府派遣留学生は身分上「私費留学生」に含まれるが、派遣国政府の政策が強く反映されていること、日本国政府が受け入れに協力的であることなど、一般の私費留学生とは大きく異なっている。
- 6) 第一次資料が入手できなかったので、調査内容は横田（1993）に依る。
- 7) 個人の意志・行動を規定するのは政治的範疇である国籍ではなく、母語の文化であり、帰属する種族・宗教である。マレーシアは、マレー系・インド系・華人から構成されている複合社会である。この点に留意しないで調査対象をマレーシア人とした研究も見られる（例えば Niikura 1999）が、収集したデータの妥当性・信頼性に疑問があると言わざるを得ない。
- 8) 国立高等専門学校では基本的に、マレーシア政府派遣留学生を各学科に一名ずつ受け入れている。したがって学校名を明らかにすると自動的に個人が特定されてしまうので、調査対象者のプライバシーを保護する観点から、学校名は伏す。
- 9) イスラームでは伝統的に成人が早く、マレー系マレーシア人は18歳を大人と自認していることに加え、留学生はマレーシア政府から奨学金を給付されているので経済的にも独立している。留学生は五年間の中等教育の後、留学プログラムの規定によって二年間の予備教育を受けてから日本に来る。したがって来日時には19歳に達しているが、高等専門学校の三年次の日本人学生は満17歳なので、2歳の開きがある。
- 10) 「現在、各国立高等専門学校では、1年次、2年次においては基礎教科を重点的に習得し、専門科目については3年次からの履修が多くなることから3年次からの入学が適切と判断されている」（留学交流事務研究会 2000, 79）とある。
- 11) イスラームの留学生40人を対象としているが、国籍はインドネシア、マレーシア、バングラディッシュ、パキスタン、イラン、トルコ、エジプトなど多岐に渡っている。しかもインドネシア人が15人（38%）でも多数を占めている（森・杉万 1993, 26）ので、厳格な宗教性は現われていないと推察できる。
- 12) 留学生は帰国後、日系企業に就職する比率が非常に高いので、日系企業の初任給の平均月額を紹介しておく。『マレーシアの投資環境』（1995）に掲載されている、マレーシア日本人商工会議所の「賃金実態調査報告書」によれば、日系企業の初任給（リングギット／月）は、業種平均で中卒437、高卒535、二年生大学卒687、四年生大学卒1,703、大学院卒2,172である（33）。
- 13) 「外国の高等教育機関と提携し、場合によっては履修課程の一部を当該国に留学して学ぶという形態」（杉村 1998, 25）である。「アセアン・シェフィールド大学（The ASEAN Sheffield Medical College）」の場合、最初の二年間をイギリスのシェフィールド医科大学で学び、残りの三年間を帰国してイボのカレッジで履修する。ツイニング・プログラムの利点として、留学生の受入れ国での修学期間が短縮されることになり、留学に際しての経費を削減することができる（留学交流事務研究会 2000, 110-111）とある。
- 14) マラヤ大学の日本留学予備教育課程日本語科では、指導のねらいを「日本の大学教育を受けるのに必要な日本語能力を養成することが目標で、とりわけ教科書や文献・資料を読みこなす読解力を養成すること、大学の講義を聴き理解するための聴解力に重点をおいている。」（飯塚 1999, 7）と明記している。
- 15) 面接調査(1)の調査対象者とは別人であり、面接調査(1)の内容に関して何も知らされていない。この留学生は筆者の指導生であり筆者とラポール（rapport：信頼関係）が確立しているので、調査に協力的であり、面接は短時間で終了することができた。
- 16) チューターは、留学生と同じ学年の同性の寮生から選ばれて1年間留学生の生活の助けを行う。
- 17) 『心理学事典』（1981）によれば、「自分の態度、意見、趣味や興味、仕事、パーソナリティや身体的特徴などについて、他人に打ち明けること」（178）である。

【文献】

- Blum-Kulka, S., & Olshtain, E. 1984 Requests and apologies: A cross-cultural study of speech act realization patterns (CCSARP). *Applied Linguistics*, 5, 196-213.
- Brown, P., & Levinson, S. C. 1987 *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Niikura, R. 1999 The psychological process underlying Japanese assertive behavior: Comparison of Japanese with Americans, Malaysians and Filipinos. *International Journal of International Relations*. 23-1, 47-76.
- Prentice, D. J. 1990 Malay (Indonesian and Malaysian). In B. Comrie (Ed.), *The World's Major Languages*, 913-935. New York: Oxford University Press.
- Takahashi, T., & Beebe, L. M. 1987 The development of pragmatic competence by Japanese learners of English. *JALT Journal*, 8, 131-155.
- 飯塚達雄 1999 『マレーシアにおける日本語予備教育』国際交流基金日本語センター
- 伊藤恵美子 2000 『「断り」行為に見られる母語から日本語へのプラグマティック・トランスファー—マレー語話者の場合—』愛知淑徳大学大学院コミュニケーション研究科 異文化コミュニケーション専攻 修士論文
- 井上孝代 1997 『留学生の発達援助—不適應の実態と対応—』多賀出版
- 井上孝代・伊藤武彦 1997 「留学生の来日1年目の文化受容態度と精神的健康」『心理学研究』68-4, 298-304.
- 小野沢純 1997 「マレーシアの言語と文化」小野沢純(編著)『ASEANの言語と文化』167-195. 高文堂出版社
- ギアーツ C. 梶原景昭・小泉潤二・山下晋司・山下淑美(訳) 1991 『ローカル・ノレッジ 解釈人類学論集』岩波書店 (Geertz, C. 1983 *Local Knowledge: Further Essays in Interpretive Anthropology*. New York: Basic Books.)
- サイド H. A. (編著) 小野沢純・吉田典巧(訳) 1994 『マレーシア—多民族社会の構造』勁草書房 (Syed, H. A. (Ed.) 1984 *Kaum, Kelas dan Pembangunan Malaysia*. Persatuan Sains Social Malaysia.)
- 佐野秀樹 1992 「留学生のカウンセリング」『現代のエスプリ』294-1, 71-80.
- シタラム K. S. 御堂岡潔(訳) 1985 『異文化間コミュニケーション：欧米中心主義からの脱却』東京創元社 (Sitaram, K. S., & Cogdell, R. T. 1976 *Foundations of Intercultural Communication*. Columbus: Charles E. Merrill Publishing Company.)
- 嶋信宏 1992 「大学生におけるソーシャルサポートの日常生活ストレスに対する効果」『社会心理学研究』7-1, 45-53.
- 周玉慧 1993 「在日中国系留学生用ソーシャル・サポート尺度作成の試み」『社会心理学研究』8-3, 235-245.
- 周玉慧 1994 「在日中国系留学生に対するソーシャル・サポートの次元—必要とするサポート、知覚されたサポート、実行されたサポートの間の関係—」『社会心理学研究』9-2, 105-113.
- 周玉慧 1995 「ソーシャル・サポートの効果に関する拡張マッチング仮説による検討—在日中国系留学生を対象として—」『社会心理学研究』10-3, 196-207.
- 杉村美紀 1998 「マレーシアの高等教育における1990年代の改革動向—国民教育政策のもとでの多様化と民営化」『国民教育』4, 21-33.
- 杉本均 1985 「マレー半島における民族教育政策」小林哲也・江淵一公(編)『多文化教育の比較研究—教育における文化的同化と多様化』259-286. 九州大学出版会
- 外林大作・辻正三・島津一夫・能美義博 1981 『心理学事典』誠心書房
- 瀧本孝雄 1992 『学生相談室ニュース』獨協大学学生相談室
- 竹熊尚夫 1998 『マレーシアの民族教育制度研究』九州大学出版会
- 續有恒 1975 「調査的面接法」續有恒・村上英治(編)『心理学研究法11』65-124. 東大出版会

- 東海銀行 外国営業推進部アジア室 1995 『マレーシアの投資環境』
- 中村佳子・浦光博 2000 「ソーシャル・サポートと信頼との相互関連について—対人関係の継続性の視点から—」『社会心理学研究』15-3, 151-163.
- 西野節男 1994 「ムスリムはどう教育されるか—インドネシア」片倉もところ（編）『講座イスラーム世界1 イスラーム教徒の社会と生活』85-116. 栄光教育文化研究所
- バーロ D. K. 布留武郎・阿久津善弘（訳）1972 『コミュニケーション・プロセス』共同出版（Berlo, D. K. 1960 *The Process of Communication: An Introduction to Theory and Practice*. New York: Holt, Rinehart and Winston.）
- 弘末雅士 1995 「東南アジア」三浦徹・東長靖・黒木英光（編）『イスラーム研究ハンドブック』180-185. 栄光教育文化研究所
- マハティール b. M. 1995 「私の履歴書」『日本経済新聞』日本経済新聞社
- 水谷修 2000 『日本語教育のための教員養成について』文化庁文化語部国語課
- 森永壽・杉万俊夫 1993 「日本人大学院生とイスラーム教徒大学院留学生の宗教意識・行動の比較」『社会心理学研究』9-1, 22-32.
- 山梨正明 1986 『発話行為』大修館書店
- 横田雅弘 1991a 「留学生と日本人学生の親密化に関する研究」『異文化間教育』5, 81-97.
- 横田雅弘 1991b 「自己開示からみた留学生と日本人学生の友人関係」『一橋論叢』105-5, 629-647.
- 横田雅弘 1993 「異文化間の友人関係—留学生と日本人はどのように親しくなるのか」『現代のエスプリ』308-3, 90-98.
- 留学交流事務研究会（編著）1998 『留学交流執務ハンドブック』第一法規出版
- 留学交流事務研究会（編著）2000 『留学交流執務ハンドブック』第一法規出版
- 和田実 1998 「大学生のストレスへの対処、およびストレス、ソーシャル・サポートと精神的健康の関連—性差の検討—」『実験社会心理学研究』38-2, 193-201.